

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	病態制御科学領域消化器内科学教育研究分野 氏名 佐竹美和
指導教授氏名	若林 孝一
論文審査担当者	主査 褒田 健一 副査 佐々木賀広 副査 鬼島 宏

(論文題目)

Capsule endoscopy for differentiating early Crohn's disease from Behcet's disease.
(早期クローン病のベーチェット病との鑑別におけるカプセル内視鏡の有用性)

(論文審査の要旨)

クローン病は早期からの生物学的製剤を含めた治療介入が患者の予後に影響すると報告されているものの、早期病変の診断は困難で、ベーチェット病との鑑別が困難な症例も多い。近年、カプセル内視鏡が開発され、比較的少ない侵襲で高率に全小腸を観察できるモダリティとして両者の鑑別と早期病変の診断への期待が高まっているが、現在まで詳細な検討は行われていない。そこで、申請者はクローン病もしくはベーチェット病の確定診断例のうち、発症から2年以内の症例を対象として、カプセル内視鏡所見(病変の分布、連続性、潰瘍の形態、ルイススコア)、およびCRP、疾患活動性スコアにつき評価し、2疾患での差につき検討している。

解析対象は、クローン病22例、ベーチェット病16例で、各々の平均罹病期間は4.1±0.63か月、6.9±1.9か月であった。カプセル内視鏡所見によってクローン病の90.9%、ベーチェット病の68.7%に病変が指摘され、分布はクローン病では多発集簇した潰瘍が81.8%に認められ、広範に存在する例においても遠位にかけてより典型的な縦走潰瘍など重度の病変を認める傾向がみられた。一方、ベーチェット病では潰瘍は集簇せず、孤発性潰瘍が50.0%と主な所見であった。潰瘍の形態はクローン病では縦走傾向の線状潰瘍を68.2%、縦走潰瘍も50%に認めたが、ベーチェット病では方向性のある潰瘍を認める症例はなく、類円形の潰瘍が主であった。病変の集簇性・連続性を反映して、ルイススコアはベーチェット病の213.3±28.5に対し、クローン病で1388±348.2と有意に高値であった。CRP及び疾患活動性スコアとルイススコアの間に有意な関連は認めなかった。以上より、小腸カプセル内視鏡は低侵襲で安全性も高い上に、早期クローン病やベーチェット病の診断における有用性が示唆され、治療介入の指針となる可能性が考えられた、と結論付けている。

本研究は、早期のクローン病やベーチェット病の診断におけるカプセル内視鏡の有用性を詳細に明らかにして点で新規性に優れ、学位授与に値する。

公表雑誌等名	Journal of Inflammatory Bowel Diseases and Disorders 2016, 1:108 doi:10.4172/jibdd.1000108
--------	---